

1998年度下半期活動報告書

		《 目次 》	(原本頁)
11/7～11/2	個人山行	ブータンヒマラヤ 5727m 峰	1～7
11/7	ボッカ山行	丹沢塔ノ岳	8
11/14～16	冬山偵察	北アルプス針ノ木岳	8
	春山偵察	北アルプス笠ヶ岳	8
12/4～6	雪上訓練	富士山吉田口	9
12/18～23	冬合宿	北アルプス針ノ木岳	10～13
12/31～1/2	個人山行	戸隠P 1尾根	14～15
1/17～18	日本山岳会	北アルプス梅池	
	ビーコン講習会		17
2/12～16	プレ春山	八ヶ岳	18
3/6～8	春合宿	北アルプス笠ヶ岳 (敗退)	19～20
3/21～25	個人山行	北アルプス鹿島槍北壁主稜	21～23
その他の個人山行			
	フリートーク 久田		24
	フリートーク 宗像		16～17
新人紹介 田中、山田			
			24

(電子化註)

- 1) 針の木岳 → 針ノ木岳 塔の岳 → 塔ノ岳 に修正
- 2) 電子化作業にて挿入した文章は斜線とした。

1. 日本山岳会学生部ブータンヒマラヤ登山隊 《ブータンヒマラヤ 5727m峰・敗退》

参加メンバー：宗像・蛭田（早稲田）・栗谷川（法政）・榎並（慶応）・長岡（関西学院）・小林（駒沢）
山梨（東海）

1) キャラバンまでの行動概要

10/3 成田ーバンコク

/4 バンコクーパローティンプー

/5 あいさつ回り、準備

/6 ティンプーータシタン

2) キャラバン

10/7 (晴れ) 9:00 タシタン発～9:30 コナ・チュー～9:40 1720m 9:50～10:20 1770m～
10:30～11:15 1850m チョゾン 11:50～12:35 2110m 12:45～13:20 タムジー入口 13:55
～14:20 タムジー

馬を待つために出発が遅れる。近くに住むネパーリの子供達にさよならを言ってキャラバンが始まる。吊り橋を渡りすぐに車道は終わり、黒部の水平歩道のような道を時々牛や馬に出会いながら歩を進める。うっそうとした森の中ではシダ類が多い。道がぬかるんでいるためか時々靴に蛭がくっついているのに気づく。途中で家もなくストウパが現れると稲穂が垂れた棚田が拡がり、タムジーの集落が現れる。小学校の前の広場がテントサイトだが馬が来ないので小学校に遊びにいった。半分くらいがゴヤキラを着ていて、他の子は洋服を着ている。子供達は2～3時間ぐらしかけて通学してくるらしい。小学校の中にも家族計画のポスターが張っているのには驚いた。自給自足のこの国で人口増加は深刻らしい。

/8 (曇り時々雨) 8:45 タムジー発～9:15 ギャザ 2540m 9:30～10:40 ガサ手前展望台 2410m
11:00～11:40 Zamizam Br
idge～12:15 ガサ温泉 2250m 15:00～16:45 ガサ 2810m

タムジーを出たところにあるストウパからもう遠くにガサのゾンが見えた。最初の休暇を取った広場から遠くに雪山が見える。形からしてツェンダカンらしい。時々、馬を連れて街へ出掛けて行く人に出くわす。まんが日本昔話のような世界がここでは展開されている。

橋を渡り、ガサに直接向かわず、温泉につく。露天風呂が幾つかあり、混浴で、女はスカートのようなもの、男はパンツをはいたまま入浴する。昼食後、2時間ほどかけてガサに着く。道を間違えてたどり着いたガサ・ゾンは他のゾンに比べると小さいがいかにも要塞らしくがっしりしている。ガサの広場の周辺にはバーと雑貨屋が一緒になったような店が6,7軒あり、どれもたいして変わらないが、一軒だけ電話がある。この辺りの行政の中心だけあって、中学校や女学校もある。ただ、ブータンでは紙を燃やしてはいけない習慣があるためか、周囲は結構ごみが散らかっている。タムジーを過ぎた辺りから畑作にかわっていたが、家の作りも2階建ての大きなものから、平屋の簡素なものへと変わっているようだ。興味津々で子供達が周りをうろちょろしている。

/9 (曇り) 8:30 ガサ発～9:30 3000m 9:40～11:05 3400m 11:15～12:15 3660m 12:25～
12:30 3680m (昼食) 13:00～13:20 ペレ・ラ 3770m～14:15 3610m 14:30～15:35 コイナ
3240m ガサは霧の中だった。本日戻っていく吉永さんに葉書やらをたくし、出発。今日はキャラバン中
ももっともハードな行程だそうだが、さすがに馬も通る道だけに上がり一辺倒なもの、さくさくと上が
って行ける。ただし、視界は効かないモノトーン。竹やブータンの国樹糸杉が生えている。峠は手元の
高度計では富士山ほどで、その後は単調なみちを快調に飛ばしてコイナに着く。石積みの小屋は汚く、
天井も空いているため、雨が降ってきたので小屋の裏手の水捌けのない所にテントを張って寝る。
夜、蛭に悩まされるもの数名あり。

/10 (曇り時々雨) 8:30 コイナ発～9:40 3220m 9:50～10:55 川岸の岩小屋 3250m 11:35～
11:20 Tongshi Zam (モ・チュー徒渉点)～11:40 Tsatham Zam (ロドフ・チュー徒渉点、昼食)
12:25～12:50 3360m 13:00～14:10 タシマカン 14:30～15:40 Chorten Gang 次のピーク
4000m～17:00 タシマカン

しとしとと雨の降る中でのキャラバンとなる。黒部の溪谷のようなモ・チューの右岸を上がり下りしながら歩く。モ・チューの川岸に下り着いたところでオーバーハングした岩壁があり休憩とする。キャラバン中、このような岩小屋が要所にあり、旅人の一夜の宿となるらしい。ロドフ・チューを渡るところで昼食とする。昼食にはパンやジャガイモ、チャパティーなどがでてくるが、長旅と湿気でパンにはカビが生えていた。2時間ほどで軍隊の駐屯地があるタシマカンに着く。すぐに、川を渡った所にある裏山に高度順化も兼ねて登りにいった。だいたいこの辺りはヤクの放牧地になっているらしく、でっかいヤク数頭とラヤッパの少年が一人いた。ちょうど4000mのピークにたった後、タシマカンに戻る。実際は川の上流にあるオールド・タシマカンのことをタシマカンと言うらしく、ここいらの人はこのことをタクシカと呼ぶらしい。

/11 (晴れのち曇り時々雨) 9:10 タシマカン発～9:25 Tsachuphogi Chu 徒渉点～10:05 ストゥーパ 3560m 10:15～10:50 ラヤ 3760m 13:00～14:30 タシマカン 3380m

腹の調子の悪い小林と榎並を置いて、残りのメンバーで高度順化も兼ねてラヤに観光に行くことにする。徐々に高度を上げ、村の入り口の門のところまで来て振り向くと、ツェンダカンが雲の上に現れた。ラヤは大きな家から小さい家まで整然と並んでいる。60軒ほどが立ち並んでいるらしい。ここの女性はチベット風の黒っぽい民族衣装に竹で編んだ帽子をかぶり、独特の格好をしている。ただし、靴は革靴で、おそらく日本から来たであろうジャージを上着としてほしいみんな着ている。男性はゴを着ている。村の中をうろちょろする。取り入れの季節らしく、脱穀作業をしていた。子供も馬を引いたり、忙しくはなさそうだが、みんな何かしら仕事をもっているようだ。一軒の家におじゃまして、スジャ(バター茶)とバンチャという酒をいただいた。酸味が強く、たいていのものを食べても大丈夫だった長岡が撃沈していた。タシマカンに戻り、蛭田たちが兵隊とバレーボールをしていたが、一般にここの兵隊は暇そうだった。

/12 (曇り時々雨) 9:10 タシマカン発～9:40 分岐～10:10 3480m 10:30～11:15 3670m 11:30～12:40 3800m (昼食) 13:30～14:50 4050m 15:00～15:30 ロドフ橋 4110m～3:40 ロドフ

ここからヤクのはずだったが、結局馬になり、それも到着せぬまま出発。一昨日来た道を途中まで戻り、分岐から急坂を上がってロドフ・チュー沿いの道に入る。崖沿いの険しい道をしばらく行くと針葉樹帯となり、やがて川が広がり平原となってロドフに着く。あいにく天気が悪く、正面に見えるはずの山が見えず残念。タシマカンとはうってかわって非常に寒く、毛下着を着込む。橋から二番目の小屋の前をテントサイトとする。明日からは偵察なので夜はしっかり打ち合わせをする。多少頭痛がするもの数名あり。

/13 (曇り時々雨) 偵察

蛭田・小林・山梨・カルマ＝ツォミ・ラ方面

宗像・榎並＝ロドフ・チュー右股

栗谷川・長岡・ツェリン(オーガナイザー)＝ロドフ・チュー左股

ロドフ・チュー右股

6:30 ロドフ発～7:20 B C 予定地 4200m 7:30～8:00 モレーン末端 4320m 8:10～9:00 4400m

9:10～10:00 4510m～11:00 4700m (昼食) 11:30～13:00 4400m 13:10～14:00 ロドフ

宗像、栗谷川、長岡、榎並の4人でロドフ・チュー方面の偵察に向かう。ロドフ・チュー方面からの

登山活動が可能ならば、ナリタン方面には移動せず、ロドフをBCにするつもりだ。モレーン上に上がると霧が晴れ、ツェンダカン東峰の白い姿と5727m峰の姿が現れた。ここから見た限りでは北稜が何とかなるのではないかという気はする。モレーンの上には氷河湖があり、ここで北稜方面に谷を詰める栗谷川、長岡と西稜方面の宗像・榎並とで隊を分ける。栗谷川らと別れ、西稜方面にあるバンドによじ登ろうとしたが、ここがガレガレの急傾斜で登るのに苦労する。登り着くとバンドの縁だと思っていたところは尾根になっていて、その向こうにこじんまりとした谷間が広がっていた。その尾根づたいに登っていくと西壁の基部になり、北稜方面にはバンドが続き、南面には南稜であろう尾根が延び、小さい氷河も見える。西壁を南に回りこもうとしたが、時間なのでスケッチをして引き返す。この辺りにはBCを設営できそうな原っぱがある。尾根のこちら側を下りる。所々小さい草原が広がり、せせらぎが非常に美しい。やがて流れはふたたびモレーンからガレた石の間をこぼれ落ち、ロドフへと至る。対岸に戻るのに苦労した後、テントサイトに帰りつく。夜、カルマさんの話だと、馬もヤクもモレーンの下までしか行くことができず、それから先は人が運んで荷揚げするしかないらしい。いずれにせよ、もう一回偵察してみて登路を確認し、BC適地を探さねばならないだろう。ツォミ・ラ方面はあまり成果はなかったらしい。バンド先の北稜基部に望みをつなぐ。

/14 (晴れのち曇り)

宗像・山梨・カルマ＝ロドフ・チュー右股

蛭田・長岡・ツェリン＝ロドフ・チュー左股 (右岸)

小林・栗谷川・榎並＝休養

ロドフ・チュー右股

ロドフ発 6:20～11:50 4700m引き返し点 12:15～15:40 ロドフ

当初は全員でロドフ・チュー方面に偵察に行く予定だったが、栗谷川・小林・榎並と次々と体調不良で引き返し、結局4人で偵察に向かう。モレーン末端で蛭田・長岡と別れ→股に向うも、なかなか徒渉ができず、かなり上流でやっと尾根によじ登る。バンドの取り付けのところに荷物を置き、カルマさんを昨日BCによいと思った所に案内し、そのまま少し引き返してバンドを見に行く。バンドとはいうもののかなり幅は広く昨日の谷間同様、非常に美しい所である。下り着いたところはBCを置けそう。ここから対岸の蛭田達と交信。今まで頂上と思っていた西稜の頭にあたる墓石ピークは頂上ではないこと、頂上直下にある雪のバンドがルートにできそうなことを告げられる。しかし、ここからすぐ背後にそびえるピークはとても雪のバンドをルートとして選べそうにない。さらに、バンドを遮る形で5727m峰方向から延びる小尾根にはいあがる。その向こうには氷河湖があり、そこに向かった氷河が垂れる。北稜への登路として考えられる、ツェンダカン東峰との間の氷河に突き上げる水流の基部までは楽に歩いて行けるであろう事を確認できたので引き返す。山梨は高度でかなり弱っている。カルマさんがバンドからロドフ・チュー本流(左股)へと下りるガレ場をすたすたと下りて行ってしまったのでしかたなく付いて行ったのが失敗の始まりで、やがて川岸が迫り、氷河湖の徒渉を余議なくされる。昨日登って来た道をたどり、ロドフに着く。よる、明日はモレーン下の奥の小屋までテントサイトを移動し、そこをBCとしてさらに翌日バンド上、氷河湖のほとりにABCを上げることに決定。

/15 (晴れのち曇り) 8:00 起床 9:00 朝食

栗谷川・榎並＝右岸の裏山へ偵察

蛭田・宗像・長岡・小林・山梨

本日休養日。さすがに連日の行動で全員疲れがたまってきたようだ。バッチリ天気がいいので5727m峰がよく見える。昨日休んだ栗谷川・榎並は裏山に南稜の様子が見えないかどうか偵察に行く。栗谷川らの報告によると、やはり5727m峰のピークは西稜の頭ではなく、その奥にあたる北稜の頭らしい。

夜、ルートを北稜に絞って登山活動を始めると決める。南稜の可能性もあるが、余裕があれば偵察を出すことにする。

/16(晴れのち曇り時々雨) 9:30 ロドフ発～10:20 モレーン下BC 13:50～15:40 バンド取り付け
デポ地点 15:50～17:40 BC

ABCを氷河湖のわきに上げるために、ロドフの平原の一番奥の石小屋、つまり、モレーンの直下に設営することにする。馬が入れるのはここまで。ここまではすぐ着くので、遅れ起きて歩いていく。振り返ると、ロドフを挟んで5727m峰と反対側にチョモラーリが見える。BCに設営を終え、ゆっくりしていたが、結局我々もスタッフと一緒に個人装備の荷揚げをすることになる。右股には丸木橋も架けられて整備され、順化もうまくいっているのでバンド取り付けのデポ地点までは快調に歩けた。明日はここからさらにバンド上まで荷揚げをする予定だ。キャラバンの最初の方からずっと腹の調子の悪い小林はBCに居残りだった。

/17(晴れのち曇り)

宗像・長岡＝BC→ABC→氷河舌端まで偵察

蛭田・栗谷川・榎並・山梨＝BC→ABC

小林＝BC

氷河舌端までの偵察

BC発 9:05～10:50 デポ地点 11:30～12:50 ABC 13:15～14:20 氷河取り付け 4900m 14:35～15:15 ABC 15:20～荷揚げ～17:00 ABC

本日ABC設営。蛭田・宗像・長岡がさらに偵察をするために先行する。昨日のデポ地点までサブザックで行くが、個人装備をそのまま揚げるのはかなり苦しいと判断して、宗像・長岡はそのままサブザックでバンドに向かう。蛭田のみメインザックに荷物を満載して出発。この間のバンド上の尾根からBC適地を探すが、あまりいいところはないようなので、いったん湖岸に下り、もう一度湖岸を上がりかえしてコルに出ると氷河から流れ落ちる水流の基部はちょっとした平地が広がっている。ここをABCとすることにする。宗像・長岡はそのまま氷河への上り口を探すために偵察に向かい、蛭田は場所を知らせるために引き返す。水流通しに登ることも考えられたが、ABCから見て左の岩壁沿いの土のリッジを選ぶ。リッジは途中左側が切れ落ち悪いが、難なく登って行ける。途中から岩壁基部を右にトラバースし、石ころだらけのところを氷河に向かって進む。ガレ場をたどり、右の凹部を進み、簡単に氷河に達する。ロープなしで氷河まで来れることが分かり、目的を達したので引き返す。長岡は少々頭痛がするようだ。途中、交信でダブルボッカを言いつかり、ABCから空身でバンドへと引き返す。栗谷川と合流し、小尾根に登り返した所で蛭田、榎並とスタッフに会う。長岡、榎並の個人装備を交替で持って上がる。ABCの位置を予定よりも奥に設定し、スタッフへの説明も十分ではなかったのも、ABC入りはくたくたになった上、夜も食料がなかなか上がってこず、暗くなってからスタッフが往復して持ってきてくれた。スタッフはバンドに引き返し、岩舎の下で泊ることになった。

3) 登山活動

10/18 (晴れのち曇り)

宗像・山梨＝ABC→5050m→ABC (ルート工作)

榎並・長岡＝ABC→5000m→ABC (サポート)

蛭田・栗谷川＝ABC

小林＝BC

ルート工作およびサポート

昨日消耗した蛭田と装備の整理をする栗谷川を残してルート工作に出発。ただ、他のメンバーも疲れているので出発は遅れる。氷河までは昨日のとおりになる。いよいよ、アイゼン、ピッケルをつけての本格的な登山活動になる。タイトロープを組み、氷河上ではアイゼンはさくさく決まるが、疲れと高度で足取りは重い。氷河は下から見るとより大きく、しばらく平原上の所を直上した後クレバス帯となる。後ろのほうでは榎並・長岡が赤旗をたてながらついてくる。クレバス帯を右手の北稜へ続くであろう斜面を目指して縫っていく。ようやく斜面の取り付けまで来て、斜面上のコルを目指して登って行けるかと思ったら目の前にクレバスと雪壁が出てきた。フィックスを張ろうかとロープを出す、荷揚げに往復するには不向きと判断して、時間もきたのでギア、フィックスをデポして榎並、長岡と合流して引き返す。下りはあっという間にABCに着いた。夜、雪が降る。明日の行動が心配だ。

/19 (曇り時々雨)

蛭田・栗谷川＝ABC→HC予定→ニードル基部→ABC (ルート工作)

宗像・榎並・山梨・長岡＝ABC

小林＝BC

本日休養。蛭田と栗谷川がルートを延ばした。目標の山はかなり厳しいらしい。

/20 (雪のち曇り)

蛭田・宗像・栗谷川・榎並・長岡・山梨＝ABC

小林＝BC

ABC (停滞)

5:00起床

朝、起きると雪が降り積もっている。積雪量5~10cmくらい。なだれを警戒して停滞とする。午前中に雪も雨になりやがて止んでしまった。午後には雪も溶け、天候は安定しないものの明日は行動できそう。BCの小林も明日はBCに上がって来れるらしい。

/21 (晴れのち曇り)

蛭田・栗谷川＝ABC→HC

宗像・榎並・長岡・山梨＝ABC→HC→ABC

小林＝BC→ABC

HCへの荷揚げ

ABC発7:20~8:20氷河取り付け8:40~9:40 5020m9:50~10:45 5140m 11:00~

12:15HC5270m13:15~14:45ABC

小林以外の全員でHCの設営に向かう。朝から調子がよくなく、荷物が異常に重く感じられる。晴天の下の氷河を蛭田たちが開いたルートをたどりながらゆっくりと登っていく。HC予定地についてようやく北稜の全景が望める。頂上直下はかなり立った岩塔であり、おそらくかなりの困難が予想されるだ

ろう。そこを登っている自分の姿を想像して久しぶりに緊張する。明日から工作に当たる蛭田・栗谷川を残して下山にかかる。壺足であつというまにABCへ。まったく、下りは早い。ABCにはオーガナイザー以下スタッフが上がってきていて、しばらくして小林もやってきて久しぶりの再開を喜ぶ。

/22 (晴れ時々曇り)

蛭田・栗谷川=HCからルート工作

宗像・長岡・山梨=ABC→HC

榎並・小林=ABC→HC→ABC

HC入り

ABC発7:15~8:15氷河取り付き8:40~9:35 5020m9:45~10:55 5140m~12:00HC

HCに上げる荷物を持って昨日とほとんど同じ行程で登る。氷河上は日が照ると5月の雪山のようで薄着で登って行く。HCに着くと北稜上で蛭田が工作をしているのが見える。もう一張りテントを設営し、水を作っていると蛭田たちが帰ってきた。

/23 (晴れのち曇り時々雪)

宗像・栗谷川=HCからルート工作

山梨・長岡=サポート

小林=ABC→HC→ABC

榎並=ABC→HC

蛭田=HC→ABC

ルート工作

HC発6:40~8:45雪稜手前5300m9:00~12:45岩稜帯手前引き返し点~15:00HC

寝過ごし。手早く装備を分け、雪の斜面に飛び出す。昨日蛭田たちが張ったフィックスをたどって、ニードルの右をトラバースし、ガラガラの岩稜を下る。なるほど稜の左側は切れ落ちていてはるかに下に氷河が広がる。下に着いた所でギアがデポしてあり、さらにフィックスをたどって今度は左のバンドをトラバース。フィックスが終わった所で岩峰上に向かって宗像リードで20mフィックス。そこからは雪稜になり、サポート隊が来るのを待って、フィックスを受け取り、タイトロープでコルへと下る。足首からももくらいまでもぐる。主に稜の左側を交替で進み、コルからアイゼンも取ってしまい、稜線に出る。やせ尾根だかもぐるので高度感はあるが緊張感はそれほどでもない。一か所雪壁状になった所があり、ひざラッセルでよじ登る。そこを抜けると再び岩峰になり、栗谷川リードで90mフィックス。ぼろぼろで全くうれしくない。頂上へと至る岩稜帯までナイフリッジを長岡、山梨にそれぞれフィックス100m分工作してもらう。頂上岩壁、その手前の岩稜ともかなり厳しそうで、シビアなクライミングを要求されそう。雲も出て時間も来たのでギアをデポして引き返す。フィックスのアプザイレンや、スタカットも交え、雪稜の登り返しにへとへとになりながら雪の中HCに帰り着く。

/24 (晴れのち曇り)

宗像・栗谷川・榎並・長岡・山梨=HC

蛭田・小林=ABC

休養日。昨日の疲れもあり、ゆっくり起きる。ラジウスの調子は極めてよくない。昼過ぎにテントの前に車座になり、明日の ATTACK についてのミーティングをHCのメンバーとする。頂上直下の困難性を考えて、多人数よりも少数での ATTACK を狙うことにする。したがって、宗像、栗谷川で ATTACK 隊

とし、山梨、榎並にサポートにあってもらい、長岡は翌日以降の ATTACK に備えて温存のためテントキーパーをしてもらうことにする。蛭田から交信で了解を得、明日の出発を 4:00 とし、早々と寝ることにする。

10/25 (晴れのち曇り)

宗像・栗谷川=ATTACK

榎並・山梨=サポート

長岡=HC

蛭田・小林=ABC→HC

ATTACK

2:00起床 4:05HC発~6:30デポ地点~10:30最終到達点~10:40頂上岩壁手前のスノーピーク
5450m 11:20~15:05雪稜取り付き~15:15雪稜終了点~16:50HC

満点の星空、絶好の ATTACK 日和だ。暗い中栗谷川とコンテを組んで出発する。いつもの通りフィックスをたどり、北稜上をヘッドランプの明かりを頼りに進む。雪稜にでると徐々に夜が白んできて朝日に照らされた山々が雲の上に姿を現し始める。再びコンテを組み、一昨日の古いトレースをたどって順調に歩みを進める。再び岩峰のトラバースになるころにはすっかり明るくなる。フィックスから目の前の岩峰群そしてその先の岩壁へとロープを延ばすことにする。ここまでは予想より早く来ることができた。まず、栗谷川リードで岩稜帯基部までの雪稜を終え、右手の岩と雪面とのコンタクトラインをたどる。コンタクトラインがちょっとしたバンドになっている。ビレーを始めたところで榎並が追い付いて来てロープを受け取る。スタカットでそのまま宗像リードでコンタクトラインを詰める。やがてバンドは雪面はかなり急で下の氷河までかなりの高度感を感じる。プロテクションにフレンズを岩に噛ませ、雪面に踏み出す。岩に雪がのっかっただけでだましまし登る。稜線によじ登り一息つく。3ピッチ目、栗谷川リードで稜上の3メートルほどのギャップを残し、岩峰の右基部を再びトラバース。榎並が来る前に栗谷川を追いかける。追い越してさらに右のトラバースを続けるが、前方は傾斜が急すぎ、悪そうなので稜線の左側を見るために再び稜線に登ってみることにする。キノコ状になった雪をじわじわと切り崩して足を一步一步上げる。コルへと上がってみると左側には雪のスロープがスノーピークまで続く。岩の棚を少し登って一段下り、岩角でアンカーを取る。稜線のこちら側は陽も当たり、時間も下がっているの暑いくらいだ。栗谷川はそのままランペを登って行き、スノーピークの頂上まで行って少し下りたところでアンカーを取った。

スノーピークから見た岩壁は取り付きとして考えられる所から 100m以上の高さでほぼ垂直にそびえている。予想していたよりもはるかに大きい。二つの岩峰からなり、その間のルンゼ状のフェースから考えられなくもないが、上部はハングしている。稜通しではさらにかぶっていてリスもない。とにかく岩峰の基部までいってみることにする。スノーピークの右側面の雪面をコルに向かって下りる。この部分も悪く、こんなところばかり順番が自分に来る。コルまで来て裏側を覗きこむが、すでに雪面ではなく、ここをトラバースするのはかなり困難かつ危険な上に距離が長い。栗谷川をビレーして岩壁を視認してもらおうが裏側も直登も極めて厳しいと判断し、敗退を言い交わす。スノーピークに戻り、HCに連絡を取る。予想される危険に比べて、この岩壁の頭が頂上であるという保証もないのである。

気持ちの整理ができないまま下山にとりかかる。稜上までスタカットで戻り、岩角にスリングをかけたアップザイレン。その後榎並が張ったフィックス終了点まで来て再びアップザイレン。フィックスはなるべ

く回収するつもりだが、このピッチは急なので残すことにする。ただ、後半50mはロープを切って回収することにするが、栗谷川が通過した後、うかつにも宗像が切ったロープを落としてしまい、ノーロープで歩くことになってしまった。そこから先はサポート隊も手伝ってくれて回収する。雪稜までのフィックス90mも残置し、くたくたになりながら雪稜をたどる。残りのフィックスは明日以降の回収となるだろう。暗くなりつつなる中、ようやくテントが見えてきて、蛭田が出迎えてくれた。みんなを見ると、敗退ということを受け入れざるを得ないということ複雑ではあるが受けとめているようだった。

/26 (曇り時々雪)

宗像・栗谷川・榎並・山梨=HC→ABC

蛭田・長岡・小林=HC→フィックス回収→HC→ABC

荷下げ

10:30 発ABC 発~11:20 氷河取り付き~12:20 ABC

朝遅く起きると天気はあまりよろしくない。蛭田たちが回収に向かった後、ゆっくりと共同装備を整理する。頑張っって重荷を背負う。久しぶりに通る氷河は溶けて大分地形が変わっている。疲れて重いし、ゆっくりとしか歩けない。氷河の下部は赤旗も倒れていて、ガスも出てきたので下り口を探すのに若干手間取る。取り付きでロープを持つとさらに重くなり、重荷でふらふらしながらもABCにたどり着く。途中、蛭田たちも今日中にABCに下りることを交信で聞く。ABCに残る豊富な食料を使って暇をつぶしていたが、5:00の交信で蛭田たちから連絡がない。天気が悪いのでまさかと思って心配していると、10分ほどして上のほうから声があった。まず、ヘルメットに雪をつけた蛭田が現れた。ややあつて長岡、小林も下りてきた。みんな疲れてはいたが、久しぶりにABCに全員がそろろう。どうやら無事に下りるというもう一つの目標は達成できそうだ。

/27 (晴れ) ABC 発 14:30~14:50 バンド上のリッジ 15:00~17:10 BC

ロドフへとさらに荷下げ。昨日降った雪は朝のうち白く残っていたが、日が照るとほとんど消えてしまった。荷物、食糧の整理をしているとスタッフが3人上がってきて、結局今日一日でABCをすべて撤収することにする。ちなみにABCから見た敗退した岩峰はここからでは頂上とは思えず、まだ右のほうに高いところがあった。結局、頂上はどれなのか混乱するだけだった。よせばいいのに今日も重荷で、蛭田・栗谷川・山梨がさっさと先に行ってしまうなか、残りのメンバーでゆっくり休みながら下山する。

4) 登山活動後の行動概要

10/28 ロドフ~ナリタン

10/29 ナリタン~カラカチュ・ラ~ロドフ

10/30 ロドフ~チュムチュン

10/31 チュムチュン~チャムサ

11/1 チャムサ~ガサ

11/2 ガサ~タシタン

11/3 タシタン~プナカーティンパー

11/4 ティンパー (観光)

11/6 ティンパー~パローカルカッタ

11/7 カルカッター成田

2. ボッカ山行 《丹沢塔ノ岳》

参加メンバー：宗像・蔦谷

11月7日

丹沢塔ノ岳でのボッカ（記録なし） メンバー：久田・佐藤・蔦谷 天気 晴れ

冬合宿に向けて体力をつけるためにボッカを行うことになった。佐藤の遅刻があったがそれ以降は順調に進んだ。それぞれ自分に負荷をかけて登ったのだが、後に負荷が小さかったのではとの指摘があって、反省する。

3. 春山偵察 《北アルプス笠ヶ岳》

参加メンバー：宗像

11/14（晴れ）6：30 扇沢～1：30 針ノ木峠～3：10 引き返し点～3：50 針ノ木峠

11/15（晴れ）4：30 起床 6：10 発～8：50 針ノ木岳 9：05～10：30 針ノ木岳 11：00～

2：15 扇沢

4. 冬山偵察 《北アルプス針ノ木岳》

参加メンバー：宗像、蔦谷

天気 2日間とも晴れ

信濃大町からタクシーで扇沢から針ノ木雪渓をのぼり針ノ木峠そして針ノ木まで行くはずだったが、（蔦谷が）雪渓を登るのに時間がかかり針ノ木へのアタックは翌日になった。

翌日も天気は良く、資料にするスライドを取りながら針ノ木の頂上まで行き、引き返す。テントを撤収して針ノ木雪渓を下る。扇沢から信濃大町の駅までバスで戻る。

11/16（晴れ）6：15 槍見温泉～9：10 徒渉点～9：30 東北支稜取り付き～11：30 槍見温泉

今だから言うが、1カ月前から偵察の日程を言っていたのに、直前になると、もう予定を入れてしまったことなので、とか開き直って理由も言わず、ブータンから帰ったばかりの僕を偵察に行かせて何とも思わない一年は、蔦谷はともかく非常識な奴らだと今更ながらに思う。しかも、あまりそれを自覚していない。

というわけで、春山の偵察は一人でやった。不覚にも赤布を蔦谷から受け取り忘れてしまい、現地調達して、一人山に向かう。途中から藪を漕いで、支尾根の取り付きに至り、赤布をつけて引き返す。

苦労したわりには、本番ではここまでたどり着くこともなく残念

な結果になってしまった。温泉に入って東京に帰る。

文責 宗像

5. 富士山合宿 12月4日～6日

1日目

朝、久田が遅れて到着したために少し遅れて出発。

登るに際して、他のパーティーがトレースをつけてくれていることを期待していたが、そのようなことはなくて最初からラッセルすることになった。遅い出発とラッセルが災いしたのか上っているうちに日

が落ちてしまった。そのためにヘッドランプを点けての行動となる。結局、予定の佐藤小屋より少し下の場所にテントを張った。

2日目

7合目付近まで登って雪上訓練。

ピッケルストップ・アイゼン歩行・ザイルワークなどの練習をするが、雪が軟らかかったためにピッケルストップはいまいち臨場感を欠いたという感じ。しばらくして、天候が悪くなったので引き返すと、フライを張っていないテントは濡れてしまった。夜、OBの井上さんと古瀬さんが合流。

3日目

OBと一緒に前日と同じくらいの所で雪上訓練。

前日の続きと耐風姿勢・自己脱出などの練習をする。その後テントに戻って、撤収、下山となるが遅れての出発だったために帰りもヘッドランプを点けることに。時間に余裕がない、という思いが終始付きまとった山行でした。

文責 佐藤

(注) 記録なし

6. 冬合宿 《北アルプス針ノ木岳》

参加メンバー：CL宗像（4年）、SL久田（1年）、鳶谷（1年）

離京日

久田、パッキングに苦勞する。反省無き、準備怠り癖が今日も火を噴く。西井氏、見送りにあらわる。が、途中で「ストックを持って行った方がいいのでは、いや、でも、戻るのは面倒臭いし」という実の無い議論を続けたあげく、彼が取りに帰ることとなる。

急行アルプスに立川で乗車。四人分のシートを独り占めして眠りの境地へと自分を急き立てる。しばらく車窓から夜の明かりがぐんぐんと後ろに流れていくのと、時折ふと目に入る、ガラスに映り濃い影に包まれている自分の顔とを、ぼんやりと眺めているうちに眠っていた。

1日目（12月18日）快晴

6：30 ゲートー7：00 黒沢出合いー7：50 徒渉終了ー10：40 稜線上ー14：30 1700m付近

5時ごろ着。待合室では暖かなストーブが赤々と輝いており、その暖かい心遣いに静かに感動する。

夜明けを待ってタクシーを捕まえる。というよりも、商売上手な運ちゃんに捕まる。偵察の時と同じ人らしくて、その熱心さに笑いが出てしまう。着いて名刺を差し出してきた時には、もう、あなたは偉いという賞賛の声さえ響いた。

ここでまた、問題発覚、目出帽、オーバークラブ、最初に使うからと最後に入れた筈なんだが、忘れてしまった。怒られながら宗像氏から拝借させていただく。自分の馬鹿さ加減に、トホホホッとなってしまう。ゲートはまだ開いておらず、乗り越える。蓮華の東尾根の取り付きまで30分ほど歩く。黒沢出合い。徒渉地点に立つが良い場所が見当たらず、1時間ほど粘って探す。しかし、断念。時間をロスする。心をきめて靴を脱ぎ、足を浸す。さすような冷たさ。冷たいというよりも、痛い。ぬめって安定しない川底に何度も足を取られながら、クソーッと心の中で叫びつつ渡った。

徒渉地点からさらに100m程上流の疎林帯に取り付く。かなりの急勾配で、雪はない。2時間ほどで稜線に出る。徐々に雪が出てきて、時々赤布をつけながら歩く。斜面が急になる手前でワカンをつけるが、一年生は手間取った。時々熊の足跡と思われる大きな足跡を見たり、糞を見たので、なんとなーく嫌な雰囲気になる。

尾根が方向を変える 1700m付近でテントを張った。尾根の幅がかなり狭い。天気図を取り始めるが、如何せん練習不足。誰が見ても、うん、コリアへたくそだ、とばればれ級のものに仕上がった。飯を食ってしまうと、もうすることがない。冬山の夜は早い。五時過ぎにはもうシュラフにもぐり込みすぐ寝ついてしまった。

夜中、ハイキックをかまされ目がさめる。何事だ！と思う間もなく宗像氏の押し殺した声がかえって響く。「熊だっ！！」少し覚悟してしまった。縮みあがりながらも大声を出して追っ払ったつもり。効果があるのか定かではないが、他に手立てもなく、みんな真剣そのもの。

翌朝見ると、それらしき形跡が見られないため、大きな勘違いか？と思われる。なんてこった。

2日目(12月19日)晴れ時々曇り

5:00起床—7:00出発—15:00 2390m?付近

飯を食い荷物を整える。うー、もよおしてきた。白銀の世界の中、絶景を眺めつつ世紀の脱糞状態へと昇華していった。ああ、原始人原始人、よよいのよいと、と訳のわからぬことをのたまって、そそくさと荷物を担ぐ。

いきなり急斜面でのやぶこぎ。1850m手前から雪はひさまで達し、ひたすらダブルボッカ。ペースが落ちる。視界が悪く、似たような地形が続くため現在位置を特定しづらかった。2390m?かと思われるところでテントを張る。ついでにビーコンの練習もしてみた。

3日目(12月20日)曇り

5:00起床—7:00出発

昨日同様ひたすら樹林帯をダブルボッカ。やっていることはサルのように同じ。樹林そばの雪は、層が薄く何度もはまってしまい、体力を消耗した。ほんと、もう嫌になってしまう。まだまだ続く。どんどん続く。左側に雪庇が出て、これをよけて右側へ行くと樹林帯ではまり続ける、の繰り返しだった。所々樹林帯が切れる。しかし、そこはかなり風が強く、立ち止まってしまうこともしばしばだった。両側は切れ落ちており、やせ細った尾根。斜面には木が生えていなかったり、なぎ倒されているようなところがあり、初めての自分はびびりまくる。

一年二人はかなり疲れて、ラッセルはほとんど宗像氏に任せていた。途中久田は赤旗とマットを落としてしまうが、指摘されるまでまったく気付かなかった。何度も枝にひっかけるうちであろう。

ジャンクション・ピークと思われる樹林の中でテントを張る。斜面を削って平らにしてブロックを積む。夜には天気が荒れて吹雪となり、ブロックとテントの間が狭いため、その間に雪が溜まりテントが押しつぶされ、なんか狭いなあ、と思って目を覚ました。宗像氏が勇壮にも雪かきに率先していった。一回行こう。この日初めて尊敬の念を抱く。

4日目(12月21日)快晴

5:00起床—7:00出発—11:45 蓮華岳—12:30 針ノ木峠

朝の準備は早くなりつつあり、日々の進歩が見られつつあるも、久田のアイゼンが昨日の積雪で埋もれてしまい、見つからない。埋蔵金を探すのごとく辺りを掘り散らして、やっとのことでまさしく発見。位置をはっきりと特定していなかったことを反省。それでも一年生は懲りない。しばらく登った所で鳶谷がバイルを忘れたことに気づく。宗像氏、取りに帰る。ああ、怒っているなあ。

すぐにアイゼンをつけ、急斜面をしばらく登る。この事から、昨日のテント場はJ Pの手前ではないかと思われる。久田は“へたくそ”であり、何度も注意を受ける。後に、期待通りにスパッツを破くこととなる。樹林はなくなり、クラストした表面はアイゼンがよく利く。穴はまりはまり、ぶかぶかズボツという狂いそうな状態から解放された我々は、あたかも水を得た魚のごとく順調に高度を稼ぐ。天気の問題はないが、扇沢側からの風が強い。

蓮華岳頂上。天気晴朗なれども風強し。絶景なり。穂高、剣。針ノ木、槍ともによく見える。ちゃきちゃきと写真を撮って針ノ木峠まで下りる。視界が悪いと迷いそうなので、篠竹を立てていく。かなり斜面は急であり、一年二人は恐くてソロリソロリ。

峠では、小屋は半分雪に埋まっていた。迷いながらも雪洞を掘ることにする。土木作業約2時間。火を焚いていると久田が調子こいて掘りすぎた天井の穴が貫通。空気穴だと必死の弁解を試みるが、あえなく失敗。シュラフを乾かしてのんびりと疲れを癒す。

5日目(12月22日)曇りのち雪

4:50起床—7:00出発—9:45針ノ木岳—11:45針ノ木峠

雪洞の中は、物をなくしやすい。久田のスパッツが見つからない。アイゼンはしっかりと利く。黒部側からの風強し。所々急峻な岩稜があり恐る恐る登る。途中の岩稜線帯基部のトラバースで、ロープを40m出す。宗像、久田、蔦谷の順で通過。アンカーとしてピトンを一本打つ。そこから雪稜を進むが、雪庇はそれほど出ていない。

針ノ木頂上。天気はそれほど良くないが見晴らしはきく。黒部湖はとっても汚かった。天気の悪化が予想されるので、早めに下山。明日には寒気が入ってくる。同じところでロープを出す。雪洞に残してきた荷物をまとめ蓮華を登り返すも、すでに風雪強く、一年も足が遅いため、断念。おとなしく雪洞に潜り込む。中では何もすることがなく、この頃のラジオからおかしくなったかと思うほどに流れてくるクリスマスソングに八つ当たりをかましたり、下手な歌を歌う。雪洞の前が吹きだまりになり、入口が何度もふさがりため雪かきに出る。時々酸欠になって、なんか頭が痛くなってしまった。

6日目(12月23日)晴れ

5:00起床—7:20出発—9:00—蓮華岳—5:00黒沢出合い

予報では冬型であるが、外はまずまずの天気なので出発することにする。蓮華へ至り下る。樹林帯に入ったところでまた穴に何度も何度もはまり出す。蔦谷がバイルとスコップを落とす。いい加減頭に来て雄叫びを上げる始末。途中久田の失くした篠竹と銀マットを見つける。帰りじゃ、意味ねえ。何とか今日中に下山出来そうだと判明し、一同やる気。珍しく意見の一致をみる。ずっと焼肉焼肉焼肉、温泉温泉温泉、ビールビールビールの3拍子で自分を励ましていた。

途中迷うことなかったが最後で尾根を間違え、宗像は悪い斜面でのトラバースを強いられ、一年は登り返した。それでも尾根はかなりの傾斜で恐る恐る。

最後に徒渉。渡りきった時にはもう暗くて、月がおぼろげに輝いているのが印象的だった。

タクシーの運転手は女性でやさしかった。メーターを途中で止めてくれ、風呂に案内し、駅まで送ってくれた。久しぶりの人との出会いに、心が温まる。体を流し、焼肉に無口にならなくて、久しぶりのテレビはもうなんとやらで浮かれまくっている。お金がないため公園で夜を明かし、寂しくシャンパンで乾杯!

翌朝お金を下ろして、鈍行にコトコト揺られ暖かい車内に意識を任せて、思いを巡らしつつ家路へと向かうのでした。

7. 個人山行 《戸隠P1尾根》

参加メンバー：宗像・長岡(関西学院大4年)(Unit:Mao Zetung's Bedroom)

12/31(雪)10:45関学山小屋発～11:30鏡池11:45～1:30徒渉点～4:00天狗原T S

ここ数年OBと正月の山行は組んでいるが、ブータンで一緒になった関西学院の長岡と今年は戸隠に行くことにした。OBの皆様、キャンセルしてすみません。

関学のワンゲルがもっている山小屋で一日悪天をやり過ごし、今日も天候はいいわけではなかったが、このままでは絶対に取り付かず終わってしまうだろうと、鉄の意志で出発する。小屋は居心地がいいし、弱層テストをするとすっぱり切れるのだ。車道をスキーを滑らせ、地図を見ながら鏡池に出る。かなりの軽量化を図ったため、下手な僕らでも何とか滑れた。鏡池で長岡がスキーのシールを落として随分手前まで取りに行ったが、実はすぐそばに落ちていた。徒渉のある河原に下りつくと、すでにトレースが二股の方に続いていた。(後で今日下山した上智のトレースだとわかる)左に曲がり、徒渉点を見つける。案の定二人ともはまり、長岡は靴が、宗像は手袋を濡らして不快な思いをした。徒渉点から左上に夏道を上がる。やがて天狗原に出るが、すでにこのころシールがスキーにつかなくなった長岡は遅れ気味。すでにトレースがついているし、天気は下り坂だし、嫌になってくる。樹林の開けた広いところを横切り、再び樹林に入り、しばらく歩いてテントを張る。もう、長岡にとってスキーは重し以外の何物でもなかったようだ。徐々に荒れ模様になるようだ。大晦日の夜は軽量化のため、春雨が多いマーボー春雨だった。テントの中でも会話は途切れがちだった。

1/1 (曇り) 5:00 起床 7:00 発~8:40 鎖場~14:00 熊の遊び場~16:40 J P 手前 T S

長岡がもたもたして出発が遅れる。ついでに長岡はテン場にヘルメットを忘れてしまった。僕は取り付きまでスキーだったが、もちろん長岡はワカンだった。取り付きからはいきなりの急登。しばらく登ると、眺めのいいところに出る。尾根の各所にはいろいろ名前が付いているらしいが、どこも似たような感じだったので、同定はかなりさばを読んでいた。やがて鎖場に出て、ここでストックをデポし、アイゼンを付け、ロープを出す。鎖の左を宗像リードで 25m。その上は再びラッセルになり、傾斜はおちたものの、新雪でなかなか距離は稼げない。しばらく行くと再び岩が出てきて、フィックスが正面に伸びていたが、岸壁基部を左から巻いた。さらに進むと、稜線の左の広い凹状になった所に出てきて、傾斜も急になり、腰辺りまである雪をそろそろかきおとしながらじりじり進み、右の稜線に出る。雪崩そうで生きた心地がしなかった。ほとんど休みなしでラッセルの連続だったので、二人とも疲れてきた。トレースもこの辺りでなぜか無くなっていた。ラッセルから再び傾斜が強まり、ようやく全面に熊の遊び場と思しき岸壁が現れてきた。途中でロープ

を出し、左斜め上に 1 ピッチで岸壁基部に着く。長岡がてこずっているの、宗像が替わってリードする。土が若干露出した雪壁をダブルアックスで登り、再びラッセルになって、左がインゼル状になった所に、45m いったいで届く。声が聞こえにくい。長岡も登ってきてインゼル状の所をリードするが、疲れているのかなかなか進まない。それほど難しくはなさそうなので、そのまま追いかける。ところどころ草着きが露出していて登りにくい。ここを過ぎると、再び急傾斜のラッセルになる。ストックで雪を落とし、膝を立て、足を上げるという動作の繰り返しで、リズムが乱れるとすり落ちる。長岡はかなりシャリバテでいつものパワーがない。燃費の悪い昔のアメ車みたいなもので、パワーはあるけど、食わないと動かない。いつ果てるともないラッセルを繰り返していると、ようやくジャンクションピークらしいピークに着いた。宗像が上まで行って、そう確かめて、すぐ下のテントを張ろうとしたが、今度はテントポールのゴムが伸びきっていて、設営し終わるまでに 20 分かかった。ようやくテントを張り、落ち着く。無線で関学ワンゲルの砂川君の悠長な声にほっとするが、長岡はシュラフがなぜかびっちょりで不快な夜を過ごすことになる。

1/2 (曇りのち雪) 4:30 起床 6:30 発～7:30 蟻の戸渡り～9:15 雪壁基部～10:15 P1～10:30～12:30 J P 1:00～3:30 天狗原～6:15 上楠川登山口

テントを残して出発。JPから灌木を掘り出してアップザイレン 10m。その後はまたまたラッセルになり、少しトラバースして蟻の戸渡りに着く。全体的に言えることだが、この尾根はアイゼン、ワカンの着脱を頻繁に行った。長岡が蟻の戸渡りをリードする。雪庇は右側に張り出していて、左側はすっぱり切れ落ちている。30mで渡り切ったところで長岡がいきなり右側へ見えなくなった。ひやっとして声をかけたが、しばらくしてぼつの悪そうな顔をして、もそもそ這い上がってきた。小さな雪庇を踏み抜いたらしい。そのままスタカットで宗像がリードする。下部は鎖が出ていたが、上部は雪庇が出ていて、スコップで削ってずり上がっていたが、スコップを落としてしまった。全くこのペアはミスが多い。結構苦勞しいしい、稜線に出る。休憩をして、そのまま長岡に次の雪壁の基部に行ってもらおう。40mでようやく稜線に出る。ようやくP1ピークらしいものが見えてきた。ここからは再びラッセルになる。この辺りの尾根は複雑で、もし下りでガスると、迷いそうだ。ようやく頂上下の雪壁に出る。そのままロープを出さずに登ったが、岩が露出して少しいやらしかった。計画では西岳まで行くとか景気のいいことを言っていたが、もちろんこの

時点でその気はなく、写真を撮って、すぐに引き返す。天気は下り坂のようだ。さっきの2つの雪壁をアップザイレンし、行きに落としたスコップを回収する。蟻の戸渡りはノーロープで通過し、JP下の行きの下降点に着く。ここでロープを出し、ようやくACに戻る。さっさと片付けて、下りにかかる。既に雪が積もり始めていてトレースが消えるとルートファインドが大変なので、追われるように下りを急ぐ。インゼル下の鎖から45m3回のアップザイレン。さらに、行きの最初の鎖場でアップザイレン。スキーを回収し、天狗原に戻ってスキーをはいてみるが、雪が重くて、全く滑らない。行きと違って、天狗原の途中から二股に出る道を下って、ようやく広い登山道に出る。既に暗くなっている上、雪はやまず、ヘッドン行動で長い長い登山道と林道をひたすら人家を目指して歩く。ようやく上楠集落

に着くが、ここに電話はなく、携帯で砂川を呼び出してタクシーを呼んでもらうことにする。一方僕らは宝光社を目指して再び歩き始める。もう、このころになると、登頂の感慨

もうどうでもよくなっていて、雪も湿ってきて、体も濡れるし、車が走るだけにいっそう

自分たちが惨めになってくる。そのうえくるはずのタクシーは来ず、もくもくと歩いていると宝光社に着いてしまった。しかし、ここから戸隠スキー場行きのバスは既になくなっていて、正月だから飲食店もやっていない。とりあえず何か温かいものが食べたくて、目の前の旅館に行くと、親切にもそばを食べさせていただいた。本当に親切が体の芯まで伝わってくる、そばの温かさだった。ようやくタクシーに乗り、関学の山小屋にたどり着く。小屋の明かりがこんなに明るく見えるとは。

文責：宗像

《 フリートーク 》

宗像 充

[本匠と犬飼と大分大学と]

今シーズンは例によって正月は実家に帰らなかったもので、3月に暇を見つけて帰省した。僕の実家は大分市の隣の犬飼というところだが、要するに田舎である。しかし、帰省するごとに道がよくなり、橋ができて、わけのわからぬ娯楽施設は増えて行く。とはいえ、それと反比例するかのように、人はどんどん減っていくようだ。たまたま、合宿が早く終わった上智の太田が東京から遊びにきたので、車であちこち出掛けてみた。ちなみに、大分には高い山こそないが、四方八方山ばかりで、それぞれの盆地に人が散らばっている。低いからおもしろくないかという、草原のひろがるくじゅうから、緑の濃い祖母溪、深いゴルジュの溪谷、さらに高難度のフリールートと山をやっている人間には非常に興味深いところだと思う。ただし、人間は、癖のある奴が多いので、外からくる人間にとっては腰を落ち着けにくいかもしれない。というわけで、就職前の太田にはそれほど暇もなさそうなので、宮崎の岩場に行くのも考えたが、近い本匠の岩場に行くことにした。だが、横着なのでロープをもってこなくて、大分大学にも山岳部もあるだろうと、借りにいくことにした。大学内で部室の場所を探そうとうろちょろしていると、職員の方が声をかけてくれて、学務課に行けばわかると教えていただいた。それで行ってみると、ちょっときれいなお姉さんが応対してくれて、親切にも地図をコピーまでしてくれて説明してくれた。悠長な声で、「うちの大学の人かなー」と聞いてくるので、「そよの大学の人です」とか答えたら、笑われてしまった。ようやく部室にたどりつき、鍵がかかっていないので中に入ったが、休日なので人がいない。でもロープがある。厚かましいと思ったが、部室にあった電話番号に電話したら、しばらくしてわざわざ部室に来てくれた。どこの大学山岳部もそうだが、ここも部員不足で、アルプスから遠いだけに、合宿に出掛けるのも、苦勞で、活動もそれほど活発でないように見受けられた。それでも、それはそれで彼らはまじめに取り組んでいるようで、好感の持てる連中だった。何より、山岳部というだけでロープを貸していただいて、何か共通言語のようで、とにかくありがとうございました。

というわけで、再び南に引き返し、犬飼から約1時間で、本匠の岩場についた。日本一の巨大水車があったが、わざわざ電気で動かしていて、本末転倒のような気がした。ここの岩場が石灰岩のどっかぶり、5・12～5・13のルートがたくさんあるが、他にもエリアが点在していて、泳げるし、とにかくいいところだ。僕らを取り付いたところは遊歩道の岸壁に取り付けた橋からスタートするところで、平均斜度はもちろん100度はゆうに越えている。下手だから5・10代のルーフに取り付いたが、登るごとに下が川だけに露出感がものすごく、むちゃくちゃこわい。すぐにパンプしてしまって、お遊びできたから、2、3本登って、適当に帰ってしまった。ここは、遊歩道の上だけに、登っていると写真を撮られる。さて、ここの河原で、河川の改修工事をやっていたが、それだけでもきれいなので、わざわざ河原の石を並べ直して、コンクリートをぶち込んで景観を整えているようだった。だいたい、土建業で暮しを賄っている人がこの辺には多いのだろうが、それにしても、わざわざいいものをひっくりかえしせそれほどセンスのよくないものにするとは。僕は小さいころ、よく父親に連れられてこの辺に泳ぎに来ていたので残念だった。夕食の時間までにはしばらくあるので、犬飼にJ2の大分トリニークの練習グラウンドができたと聞いたので、見に行ってみた。小学校のころ、毎回の遠足で来ていた河原はすっかり姿をかえ、グラウンドが整備され、カヌーの大会で使われるのだろうポールが川の中に立っていて、びっくりした。カヌーのジャパンツアーの大会が開かれるそうで、ワールドカップの練習グラウンドにここもなるのか。川沿いをしばらく運転すると、岩場が出てきて、ペツルが打ってある。昔、犬飼で九州地区のフリ

一のコンペが開かれたと聞いていたので、これのことだろう。それにしても、岩場までは藪で、岩にも蔦が絡まっている。スケールは湯河原の正面壁ぐらいあるし、傾斜も90度かそれ以上なので、東京周辺だったらここまで荒れないだろう。ルート数もけっこうある。クライミング人口が少ないとはいえ、もう少し見直されないのだろうか。大分市から車で30分なのに。こうしてみると、カヌーはできるし、グランドがあるし、フリーのゲレンデもある。ちょっとした一大レジャーエリアではないか。おまけに交通の便はよく立地条件は申し分ない。これでなんで人が減ってくんだろう。考えればすぐ分かることかもしれないが、こういったものがあるにしても、それで、ここに住もうと思う人はいないだろう。どこの娯楽施設でもそうだが、一時的に利用するだけで、それがどういうところにあるのか関心はほとんどないのだ。ましてフリークライマーが来ても、金などほとんど落とさない。仕事もすくないし、道がよくなればそれを使って出て行ってしまおうのかな。とはいえ、住んでいる人がよければそれでいいのであり、今東京に住んでいる僕などがとやかく言ってもこの町にはこの町のやり方があるのだ。村山富一効果と、ワールドカップ効果、それにやり手の平松守彦の手腕が加わって、今まで、開発から遠ざかっていた大分にも遅ればせながら開発の波が押し寄せているようだ。でも、案外住んでいる奴らは冷めた目で変化を見つめているのかもしれない。今度帰ったら聞いてみよう。

8. 日本山岳会学生部ビーコン講習会 《北アルプス梅池早稲田大学ヒュッテ》

参加者：宗像・井上OB他多数

1/17 (曇り)

途中バスで、中央の黒川さんにあって、一緒に小屋に向かう。例のごとく、最初の傾斜で転びまくった。まったくうまくなくてない。遅れてついたのに、いきなり講師にさせられてしまい、休む間なく宝探しの練習を繰り返す。学生が2~30人くらい来ていた。ビーコンの練習は十分ではなかったのでもいい練習になった。終わってから、明日の練習のためにザックを埋める。夜は各大学のOBが歌を歌いまくっていた。にしても、早稲田の山小屋はいつ来てもゴージャスだ。

1/18 (曇り)

昨日降った雪で埋めたザックの場所は全く分からなくなってしまっていた。特定して、ゾンデを使って捜し当て、スコップを掘り出す。これだけのことなのに、実際にやってみるとなかなか難しく、いい勉強になった。そのあと実際に人を埋めてどんな感じが実験してみて、搬送などをして終了とする。実際にザックを埋めて特定するとかは、なかなかクラブでは難しく、いい経験になった。また、他の大学の人との交流も同様に有意義だった。スキーは少しはうまくなっただろうか。

文責：宗像

9. 一橋・千葉大合同プレ春合宿報告書

参加者：CL宗像(四年) SL田中(三年) 藤田(千葉大三年) 久田(一年) 佐藤(一年)

井上・古田OB

日程：2月12—16日

1日目(晴れ)

茅野よりバスで美濃戸口へ。赤岳温泉まで。テントを張る。先に入山していた宗像・井上OBは大同心に行くものの、時刻が遅いことで断念する。

2日目（曇り）

阿弥陀岳北稜（井上OB・藤田・佐藤）、中山尾根（田中・古田OB）、南方リッジ（宗像・久田）に別れる。北稜は、取り付きの場所が分かりづらく途中でミシッといういやな音を聞いて、慌てて引き返したとのこと。ラッセルがひどく、結局取り付いたところも、一般的なところではなかったらしく、他のパーティは違うところから取り付いていたとのこと。

中山、南方ともに問題はなかったが、久田は一箇所手がかりが無くてユマールを安心材料にして上がったのが怖かったなあ。

気温が低く、風が強かった為、しもやけ程度になるが、宗像氏は耳に水泡ができたが、大事には至らなかったようである。井上・古田OBは下山となる。

3日目（快晴）

硫黄岳からお鉢廻り。絶景なり。見晴らし最高。早く終わった為、ビーコンの練習をする。

4日目（晴れ）

石尊稜（宗像・佐藤・久田）、赤岳主稜（田中・藤田）に別れる。前回と違い、気温も高く快適な登坂となった。地蔵尾根の尻セードが、とてつもなく興奮的で楽しい。まるでリージュ。その後、赤岳鉱泉で搬送訓練を行う。

5日目（晴れ）

ジョウゴ沢でアイスクライミング。アイゼン、バイル、スクリュウの使い方を実習した後、宗像・田中リードで、難易二箇所トップロープを張り登る。

下山。美濃戸口では新設の温泉で体を清め、ビールで喉を潤し幸せな気分になる。

（久田 英一郎）

10. 春合宿敗退顛末報告《北アルプス笠ヶ岳南西尾根》

参加メンバー：宗像・久田・佐藤／藤田（千葉大）

行動概要

3月6日（晴れ）

予定通り、林道を歩きだす。途中から腐った雪でもぐるためワカンをつける。気温高く左手の斜面が時々石を落とす。順調に歩いたつもりだったが、林道の終点まで5時間かかる。地図上では林道終点前に合流点があるはずであったが、右手に見えた谷は笠谷というには小さすぎる気がした。

とはいえ、終点の東側が取り付きのはずであり、流れを2つ渡り、尾根に取り付く。稜上に出たところで、さらに右手にリッジが見え、そのリッジとの間に滝のかかる谷がある。

南西尾根であるならば、このような地形は出てこないはずだが、確かに林道の終点から川を渡り、取り付いたはずである。さらに偵察の結果、右のリッジと自分たちがいる尾根は上部で合流するようであり、ヒアケ谷は左手にあるはずだという合意の下、考得る限りではこれが南西尾根のはずである。おそらく右手が主稜としても、自分たちのいる尾根は地図にも載っていない支稜であろうという判断の下、上り続けることにする。それにしても、右手の谷が地図に載っていないというのは疑問だし、この尾根は南西尾根と違って南西方面へと上がっている。だが、上部で右のリッジと合流するなら、今、ここで方向が違っても、上部では変わってくるのだらうと思う。とにかくしばらく登って、リッジ上の小

ピークにテントを張る。ただ、尾根の方向はテマ場から見てもさらに南西方面に向かっているようで、明日、右のリッジと合流して、方向が修正されないようであれば、間違ったと見なし下りることにする。

ここで、宗像が林道終点の実地と地図の間違いなど、この時点で確かめようもなく、また、2本流れを渡ったとは言え、ヒアケ谷の支流である可能性もある。また、取り付くときにはちゃんと方向を確かめて取り付いたこともあり、全員納得しがたいものがあった。

3月7日（曇り時々雪）

さらに登り進む。尾根は北西へ向かわなければおかしいはずだとの考えから、左よりに進むが、結局明瞭な尾根は右よりで戻る。ガスの中から左手に見える尾根が南西尾根ではないかと気になる。とにかく、右のリッジと合流すればわかるだろうと、樹林の中をひたすら登る。しかし、登れば登るほど進行方向は南よりになり、だいぶ登った所で、ついに南になる。これは明らかに稜の高度からしてあり得ないと、宗像・藤田で偵察に向かうが、やはり、だいぶ登っても修正されない。南西尾根主稜の山々と、今いる位置を同定しつつ、とにかくこれは南西尾根のヒノキ尾とは完全に違うと判断して下りることにする。この時点で、既に2日を消費したこと、さらに南西尾根がどれなのかやはり分からないことを理由に、予定どおりのルートをトレースしてしまうのは難しいと考え、ほぼ敗退となることを言い渡す。

慎重に来た道をたどり、再び終点に戻ってテントを張る。宗像・藤田は林道に戻って、右に見えたりリッジは何なのか、本当の笠谷本流があったかどうかを確かめに行く。右のリッジは下部はかなり急で、資料に書いているように容易に取り付くとは考えにくい。さらに、その右の谷は笠谷というには細かすぎる気がした。何より、一橋の資料のように、そこから歩くのは考えられない。したがって、やはり、林道の終点は地図上のBではなく、Aポイントであり、今いるのもAではないかと考える。他の3人も資料を見つつ考えるが、下りたショックでなかなか考えがまとまらない。もし、ここがAであるなら、南西尾根は

正面のはずであり、あす、宗像・藤田でとにかく正面の尾根を登って確認だけはする必要があり、ということになった。

3月8日

早くに偵察に向かう。赤布一つでもあればまず南西尾根だろう。左手に沢を少しだけつめ、急斜面を登る。徐々に右手に移り、これ以上行っても変わらないというところで赤布を発見。昨日からの偵察を総合し、かつこの物証によって、この尾根が南西尾根であることはほぼ間違いあるまい。したがって我々がいたのはAポイントである。

だが、これからの判断は迷う。既に2日使用し、これからうまくアタックしてピストンまたは抜けることは精神的、肉体的に強行軍を強いられるだろう。行って行けないことはない、というのは難しいものである。とにかく最終的に敗退とし、笠谷林道を戻る。

文責：宗像

1 1. 個人山行 《北アルプス鹿島槍ヶ岳北壁主稜

参加メンバー：宗像／太田（上智大山岳部）・藤井（南山大山岳部）・山口（名古屋工業大山岳部）
3/21（晴れのち雪）6：40 大谷原発～8：50 徒渉点～12：40 第一クローアール上TS

このところの山岳部のネットワークは全国的だ。活用しない手はない。

太田とタクシーで大谷原に着くと、すでに名古屋チームが来ていて、山口さんが卒論の

提出のために24日までに下山せねばならないことを告げられる。その場合、山口さんと正面ルンゼに行く予定だった藤井は僕らと主稜に行くことになった。山口さんの車はなくなるかもしれないので、要らない荷物を雪に埋めて出発。途中間違えて別荘地に入ってしまったが、すぐに戻る。天狗尾根は前に来たことがあるので、記憶をたどるように既についているトレースをたどる。トレース通しで徒渉を繰り返していたが、取水口の上のところであついに靴を脱ぐのを余議なくされる。言うまでもなく冷たい。この一年はブータンといい、冬合宿といい、今回も全く徒渉が多い年だった。下りてきた人がいたので上の様子を聞くと、かなりのパーティーが入山している模様だ。快調に登り進む。例のごとく藤井はターミネーターのように早い。天気は下り坂で雪も舞ってきた。第一クローアールの手前でアイゼンを出し、ノーロープでクローアールを登る。前に来たときもテントを張った小ピークで太田が膝が痙攣していると言い出す。明日は停滞が予想され、次の日は快調でも取り付かないだろうから、そのとき天狗の鼻に移動すればいいわけで、そこまであわてる必要もないだろうと、設営することにする。なぜかパックごと持ち上げる肉で豪華なすき焼きにありつけた。ただし、鍋は手違いで忘れて来たので作るのには時間がかかった。夜は既に荒れ模様になってきて、雪かきに一回太田が出勤する。

3/22（雪）停滞

案の定天気は荒れ模様で、さらに二つ玉のおまけ付きだ。設営はしっかりしてあるので、時折雪かきをする以外、のんびりトランプでもして暇をつぶす。今回、懸垂の支点にする目的で土嚢袋を持ってきたが、これは非常に役に立つ一品である。雪袋はもちろん、個装の整理もできるし、インナーブーツの上にこれを履けば、雪も付かず雪かきのときは非常に重宝した。天気予報を聞くと、明日、明後日は晴れるようだが、「二つ玉が来た時点でだめじゃないの」といつになく弱気な太田、「晴れば登れるでしょ」と楽観的な宗像、「とりあえず天狗の鼻までは」と慎重な藤井、もう下山が決まったので無関心な山口さんと、反応はさまざまであった。さらに、ラジオから隣の遠見尾根での遭難のニュースが流れてくる。熊本学園大学の、岡本大輔から緊急連絡先の留守電にパートナーが動けなくなった、の伝言があったとのニュース。どこかで聞いた名前だな、と思ったが、そのときは隣の尾根で起こった事故に何か他人事のような感じで、九州からわざわざ出てきたのに、と聞いていた。隣とはいえ、何とも僕らにはしようがない。ところが、下山して家に電話すると、実は遭難したのは高校の山岳部の後輩で、小学校のときから僕が知っている奴だった。彼は翌日生還したのだが、終わってからこのことを知って、なんとも単純な気持ちになれな

かった。結局吹雪の中でも、自分は遭難とは関係ないと、安心していたんだろうか。

3/23 (晴れ) 10:40 発～1:10 天狗の鼻AC

今日は晴れても天狗の鼻までの予定だったので、ゆっくりと準備をする。卒論提出のために今日下山しなければならない山口さんを見送って、出発する。雪は30cmほど降り積もっている。搜索活動のヘリが飛んでいる。第二クーロアール手前のスノーリッジに1ピッチロープを出し、さらにクーロアールを宗像リードで取り付く。雪の状態は明らかに弱層がある様子で、手で雪をかき落としながらそろそろ進む。いやな感じだ。その後、藤井が先行していると、上から単独の人が下りてきた。蝶型ルンゼを登ってきたらしく、さくさくと下りていった。ロープをもう1ピッチのぼし、強風で雪の飛ばされた天狗の鼻に着く。1人用のテントが1張りあった。最低コルの下降点を見るために偵察に行く。北壁、荒沢奥壁も快晴の天気のもと、青空へとそそり立つ。カクネ里がゆったりと横たわる。

小谷部全助の荒沢奥壁の初登攀は有名だが、僕にとってはスケールのでかい北壁のプライオリティーが高かった。明日も天気がいいみたいだ。

3/24 (晴れ) 5:10 発～7:00 取り付き～1:50 北峰 2:00～3:30 AC

朝、ラジオをつけると、「日本海を北上して～」と聞こえてくる。新しい低気圧でもできたか、と思ったら、北朝鮮の不審船だった。

星がよく見える。最低コルからの取り付きは下部がよく分からないので、テントの裏手のくの字ルンゼへと伸びる小尾根から下り始める。ルンゼに入ると、思った以上に雪が積もっていて、足を踏み出した感じがいやらしい。だが、先頭の藤井はガンガン下って行く。

大声で声をかけるのもいやだから、仕方なしについて行って、何とか下りつく。前にも雪崩を起こしたことがあったので、祈るような気持ちだった。カクネ里は稜線と違って穏やかな感じだ。交替で北壁に向かって登り返す。傾斜が増してくるが、さっきの下りで大丈夫だったんだから、まず大丈夫だろうとラッセルを繰り返す。取り付きについて稜線の左側をさっきの調子でガンガン登ってたら、足元でバスタ、と音がする。やばい、と思ったが、さりとして引き返すわけにもいかず、そろそろと通過する。稜線に出て、今度は右側の稜線の基部を登る、再び稜線の左に出て、雪がクラストしてくると、やがて3～4mほどの氷の滝に突き当たる。ここで初めてロープを出し、宗像リードで取り付く、しかし氷はアックスを振るとボロボロに崩落ち、左の脇から登ることにする。よくはまる雪の中の枝を掘り出しながら登って行くと、滝の上に出た。ところがここにはさっきより大きい滝が現れた。ルート図にはなかったよな、とは思ったが、いい支点も得られそうにないし、ロープもまだ余っているのでそのまま登ることにする。ところが、すぐ終わるだろうと思っていたので、残りの二人にギアを借りるのを忘れていて、ほとんどギアがない。もろい氷にスクリューをねじ込み、それから指ぐらいの太さの枝に気休め程度のプロテクションを取って、絶対自分は落ちないと自分に言い聞かせて、ランナウトしながら、50mいっばいでようやく信頼できる灌木にたどり着く。藤井は後で4級くらいだと言っていた。すぐに残りの二人を引き上げるにかかる。太田は氷に慣れていないので、途中で落ちてしまった。

それにカジタの新しいピックはなかなか刺さらないらしい。そのまま最後にきた藤井がリードして稜線から再び雪面に出る。多分、ルート図は右の稜線を最初の滝の上から忠実に詰めるのだろう。だが、氷ができるなら、僕らが来た方が早いだろう。この辺りまでくると、大分暖かくなってきた。雪面に空の青がよく映える。どうやら核心はさっきのピッチだったようだ。藤井のところでロープを外し、やたら広い雪面をラッセルする。解説では、ルート中最も快適な所とか書いていたが、ただ長いだけだった。

太田選手のラッセル最長不倒距離記録を期待したが、そうはいかず、しだいに傾斜が増してくる中をダブルアックスも交えながら登り続け、ルンゼ上部の灌木にたどり着く。遅れて登ってくる太田にロープを垂らしてやって、そのままリードしてもらおう。上部でトラバースぎみに、再び稜線に出る。上部でトラバースぎみに、再び稜線に出る。その後の出だしはハイマツ登りで、藤井がリードするが、そのまま宗像がフリーでついていき、先に雪稜上に飛び出す。ここからは快適なスノーリッジで二人には悪いが次の岩の基部まで先に行かせてもらった。ここでしばらく休んで、岩を左から巻くと、あとは2~3級程度の岩と雪のミックスになる、一箇所いやな所があったが、ようやく主稜線にでる。最後の太田を待って、頂上に至り、登攀終了とする。時間も下がっていたので、すぐに下山に移る。途中、小さな雪洞があった。この間の単独の人のだろうか。小屋岩の上で懸垂2回して、くたくたになってテントに戻る。今、登って来たばかりの北壁がよく見える。いい気分だ。

3/25 (曇りのち晴れ) 7:40 発~12:00 大谷原

下山だ。天気はよくないが雪はもう腐ってきて、足を取られて苦勞する。クーロアールは二つともアプザイレンで下りた。藤井はシリゼートでもカッパが痛まないように、土嚢袋を破いて半ズボンにしてはいていた。とつてもセクシー。だが、だれにも会わないからできる技だ。途中、穴っぼこにはまってしまっ、起してもらおうときに藤井の歯を欠けさせてしまった。申し訳ないことをした。再び靴を脱いで徒渉し、ようやく大谷原にたどり着く。ここから携帯でタクシーを呼び出す。便利になったものだ。待っている間に太田がいきなりパンツを脱いで着替え始めたのでえらい動揺してしまった。時々車が来るというのに。とにかく全員無事で何よりだ。

文責：宗像

12. 《その他の山行》

10/10	奥多摩雲取山 (敗退)	久田・蔦谷
10/17~18	奥秩父	松田・佐藤
10/17	日和田	西井・蔦谷・久田/古瀬OB
10/31~11/2	屋久島	松田
11/29	湯河原	宗像・久田
1/30	広沢寺	宗像・佐藤
2/?	伊豆城山	宗像/太田 (上智大学山岳部)
2/31	河又	宗像/長岡 (関西学院大山岳部)
3/12・13	大分本匠	宗像/太田 (上智大学山岳部)

新人紹介

田中 真之 (社会4)

今年度ワングルからやって来た期待の新人。さすがにワングルで主将をやってきただけに技術、体力、実行力ともに充実したものがあつたが、山行中で見せるダジャレの数々に、部の中での評価は下がる一方である。例のごとく山岳部のいいかげんさにワングルのきちょうめんさを持ち込もうとしたが、宗像、久田の抵抗に少々いらだちぎみ。山岳部のだれよりも山男らしい顔だちで、山のロマンを我々にまじめに語ってくれるので、他の部員も一目置いているが、何をしゃべっているかはよく分からない。今

年の雪上訓練で落石に遭い、骨折によって戦列を離れてしまったのは非常に残念である。聞くところによると、前にも落石に遭ったことがあるらしく、山ではアンラッキーが続いている。一日も早い回復が期待される。

山田 英明 東京都は多摩ニュータウン出身。私立海城高校。18歳。

若い。何といっても若い。‘80年代生まれである。中高野球部で甲子園を目指していたらしいが、最高がシードで当たった二回戦らしく、本人としてもいささか不本意のよう。男子校の例に漏れず、好きなものはアニメと女子高生。マニアではないと言い張るが、「逮捕しちゃうぞ」を見にいったという事実は、永遠に消えない。

女性に苦手だが結婚願望はつよく、社内恋愛を密かにねらっている。好みは自分より賢くない人という、いささか弱気な主張がかわいらしい。ついでに酒にもとことん弱く、ビールを飲んだとき、眉間にしわ寄せ歪んだ、人生最大の苦しみといった顔もかわいらしい。夢がガングロになるという、微笑ましい男なのである。

《 フリートーク 》

久田 英一郎

[あれこれの思い思い]

僕は、単なる空っぽの器でしかない、語れることなんて、正直ない。そういう時はなぜかしら時々起る。聞いているだけでいい。その中でも、感じたこと。

三月の終わりに原付で事故を起こしてしまった。全くの不注意です。幸い軽症にすみましたが、あわよくば・・・というもので、そのことを思うを考え込んでしまいます。

これを契機に、自分の中が面白いことにいろいろ変化していきました。一番は、1日1日を丁寧に生きていかなければなんて、柄にも何も無いことを。そして、これからの自分の使い方。周りとの関係。毎日、反省するように。今まで、あまりに漠然としすぎたという感が。

これからどうなるのでしょうか。不安とともに、少しの期待を込めて。